

# 近代語における接続詞の成立と多様な展開

川島 拓馬（富山大学）

## 1. はじめに

- ・「近代・現代の日本語の接続詞は、古代から現代にいたる各時代の接続詞のオンパレード（田中 1984）」←他の品詞にはあまり見られない、接続詞の特色とされる。
- ・近代語における接続詞の多様な発達を探るための試みとして、新たな接続詞の成立（およびその認定）、また文章のジャンルによる使用傾向に関わる論点を提示したい。

## 2. 接続詞の成立

- ・日本語の接続詞はすべて複合語か転成語であると指摘される（京極・松井 1973 など）。
- ・接続詞の成立として一定の事例が見られるタイプとして、接続助詞から接続詞が生まれるという変化がある（小柳 2018）。
- (1) a. [～終止連体形+接続助詞]、～→ [～終止連体形]。接続詞、～  
b. 接続前部+【接続後部】→先行文末。【句頭部】、～  
e.g. ところで、が、けれども、と、ところが
- ・接続助詞と接続詞で共通する要素を含んでいる事例については、田野村（2002）が指摘し、まとめている。 e.g. 途端（に）、一方（で）、反面、結果、ついでに、おかげで
- ・以下では「一方」を取り上げ、接続助詞としての用法との関係性、また接続詞の成立に対する捉え方について考える（調査には『日本語歴史コーパス』を使用）。

### ○「一方」の用法（接続詞と接続助詞）

- ・助詞の付かない「一方」が接続詞および接続助詞として使われている用例を抽出。
- (2) 圖中の童男童女は泰西風なるに拘らず、同じく農家の繪圖に於て一方草を茹るの農夫は西洋服を着くるに拘らず、他方苗を挿む男女の服装日本風なるは果して一致を保ち兒童の心を迷はさざるを得るや否や、吾人は敢て著者の注意を乞はざるを得ず  
(「近刊雜書」、60M 国民 1888\_30020, 7460)
- (3) 新鐵道完成の上は、左なきだに年々夥しく増加する、清國移住民の數は一層増加し、萬一清國と事を構ふる場合には、その攻撃に備へざる可からざるが故に、其の對重として自國民の増加せんこと尤も必要なればなり。一方黒龍江州の人口收容力を見るに、現下の人口は頗る稀薄にして、(中略) 優に尚ほ許多の人口を吸収するを得べし  
(「黒龍江鐵道の大目的」、60M 太陽 1909\_01043, 71600)
- (4) 跡取りの兄は茂助とて親讓りの堅い一方、足袋穿いて疊の上にはばかり坐つて居ても濟むべき身で鋏柄執つて日を暮らさねば身軀の遣り所に困ると云ひ、樂みといへば植付前一度收入濟ませて一度朶華の温泉に湯治して眞の養生するばかり  
(「新學士」幸田露伴、60M 太陽 1895\_04012, 10020)

・調査範囲において、「一方φ」の接続詞としての用例は 1888 年が最も早く、接続助詞としての用例は 1895 年を初出とする。

→両者の先後関係について確たる判断はできないが、「一方φ」に関しては接続助詞から接続詞が生まれたとはいいがたい。

→更に、用例数で見ると、単独の「一方φ」の接続詞の例が 242 例であるのに対して接続助詞の例は 17 例と僅少であり、ここからも接続助詞からの変化を想定することはできない。

#### ○「一方」による接続機能の由来

・次いで「一方で(は)」「一方において(は)」「一方には」の用例を収集。

- (5) それ故、其國文學者と申すものも、右の美文の發達を研究し、其美を構成する種々の要件を論定し、そして一方で純正な理想を涵養してまゐりますると同時に、又他の一方では其理想を實在にする著述に、始終心懸けねばならぬ者であります。

(「國語研究に就て」上田万年、60M 太陽 1895\_01007, 46360)

- (6) 然れども人多ければ天に勝つ時の勢如何ともすべきにあらざれば一方に於ては石鏃を造るの法を精くし蠻民の暴を防ぐに供へざる可からずと雖も蒸氣力の有用なる事を知る以上はこれを世に用ふる事を勉めずして可ならんや

(「非時事小言論(一)」上田秀成、60M 東洋 1881\_03001, 41810)

- (7) 政府は結婚及び離婚の景況を監察するの權を有し并に公共交際上の平和に着眼して唯一夫一妻の婚姻を許し且つ一夫の數妻を娶り一妻の數夫に嫁する事及び犯姦の所行を以て國家の大罪として嚴罰するの權あり。然るに一方にはモルモーネン一夫の數妻を娶るを以て其神道の許す所となし又一方には自由戀愛黨。夫婦共時々戀愛する所の變ずるに隨て縦に配偶を改るを以て眞の自由となせる一黨あり。

(「米國政教(三)」トムソン(作)加藤弘之(訳)、60M 明六 1874\_13001, 13720)

・先ほど示した「一方φ」と異なり、これらは助詞を伴っているため、接続詞のように見えたとしても、そのまま接続詞として認定してよいか(接続機能を担う形式として機能語化しているか否か)は問題となる。

・「一方」は、語彙的に「二つ(以上)あるもののうちの一つ」という意味を持っており、そこから「複数の事柄を対比的に述べる」機能を有するように変化するのは自然な発想と思われる。

・実際に、そのような対比的な文脈で用いられている例は、近代以前に既に見られる。

- (8) 上といひ下といひ、何れ勝劣あるべしとも思えず。ただし、合戦の慣ひ、必ず一方は勝ち、一方は負く。

(保元物語、30-保元 1223\_01004, 26010)

- (9) 其月の末つかた、わか侍共の、いひあらそふ事起りて、其親戚黨類たちわかれ、大かた戸部の家人等のこりすくなく、十二月の初に、つゝに両方相戦むとす。一方は皆々、我父の年頃したしき人々にて、関といふ人の許に馳集り、けふの末の初には、うちたつべしと聞ゆ。

(折りたく柴の記、51-白石 1716-12032, 1790)

・「一方」が「一方で (は)」「一方において (は)」「一方には」の用例で、見かけ上接続詞と見なせる用例のうち、49%は「一方」もしくは「他方」とともに使われている (529/1072)。

(10) 政治世界の腐敗は、社會の腐敗を導くの誘因と云はざる可らず、一方に於て不相應に權力を有する者あれば、他方に於ては又不相應に權力を有せざるものあり

(「平家物語を讀む」、60M 国民 1887\_05002, 24380)

→「一方」がこのように複数の事柄を対比的に述べる場合にしばしば用いられるところから接続の機能が生じたと考えられ、「一方」で指される対象が具体性を欠いたものへと移行することで、「一方で」等も接続詞として成立したと捉えることができる。

(11) 此の方針に出でると前述の如く支那内地に勃興しつつある製造工業に對しても十分競争に堪へるのみならず、彼等を壓倒して優越な地歩を占めることも比較的容易である。一方に於ては工業教育の普及を計り、専門技術の研鑽を奨励し、同時に工場管理及び經營の方法を改良し、關稅其他工業政策上適當の措置を講ぜねばならぬ。

(「工業上の戦後經營策」阪田貞一、60M 太陽 1917\_08030, 13280)

・また、同様に見かけ上接続詞と見なせる用例のうち、21%はその前（一部は後）に他の接続詞が用いられており、接続詞の二重使用になっている (222/1072)。

(12) 現今の日本に於ては、斯る茫漠たる事は、迎も時と場所が承知せぬ、又た一方に於ては、固有と云ふ人あり、即ち外國風に何事をもすればこそ、外國人の下に付け、日本は日本で、ドコドコ迄も固有の日本を以て遣り通すと云ふ議論なり

(「現今の日本は適用の時代なり批評の時代なり」徳富蘇峰、60M 国民 1888\_20003, 3400)

→既存の接続詞と重ねて、同じ位置で使われることによって、「一方」を含む一連の形式が接続機能を有する文法形式へと変化することを促したのではないかと考えられる。

⇒「一方」が接続詞として成立し得たのは、もとの名詞の語彙的意味によるところが大きく、加えて形式の用いられる構文的な環境が、「接続詞」化の要因となった。

⇒「一方」に接続助詞の用法が存在するのは別の事情によると思われる、同一形式に接続詞と接続助詞の用法が存在してはいても、(1)に挙げた事例とは異なるタイプとみられる。

⇒小柳 (2018) で、(1)とは反対の「接続詞から接続助詞」への変化例は見出せないと指摘される。「一方」はこの例外にも見えるが、接続詞として確立した後に接続助詞の用法が生じたと見なす根拠はない。よって、これが反例であるとは判断できない。

### 3. 接続詞と文章ジャンル

・接続詞は、文章のジャンルや文体によって出現傾向に差があることが知られている。

→現代語については石黒ほか (2009)、中俣 (2022) など。

→近代語については近藤 (2021a,b,2023) など。

・「接続詞」全般を取り上げた調査となると、対象を設定するのが困難であり (コーパスで

品詞を「接続詞」と設定するだけでは足りない)、規模の大きな調査が必要となるので、現代語以外を対象とした研究はあまり行われていない。

- ・近藤の研究では文語/口語という軸によって分析が行われており、重要であるが、現代語を対象とした研究では文章ジャンルごとの出現傾向が調査されており、問題意識がやや異なっている。

→近代語における接続詞のジャンルの使用状況は、十分に解明されていないと言える。

#### ○近代の演説における接続詞の出現傾向について (川島 2024)

- ・文章ジャンルが特徴づける傾向を取り出すため、あまり取り上げられないことのない演説資料を対象に、接続詞の用例を収集した (目視での調査により、網羅的な収集が可能)。
- ・演説資料として金澤・相澤(編) (2015) を使用。比較対象として『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』を調査し、雑誌『太陽』(1917年・1925年) と『中央公論』(1933年・1941年) から用例を収集した<sup>1</sup>。

- ・川島 (2024) では順接・逆接・添加の接続詞について調査したが、本発表ではそれ以外の接続詞についても追加で調査を行った。具体的な形式は以下の通り。

【対比】 一方、あるいは

【転換】 ところで、さて、では

【同列】 すなわち、要するに、つまり、たとえば、殊に、特に

【補足】 ただ、ただし、なお

- ・演説および雑誌における接続詞の用例数について 1000 文あたりの調整頻度を算出した上で、それらを比較し、その接続詞が演説において相対的に出現しやすいか否かを測った<sup>2</sup>。

【表】 演説において特徴的な出現傾向を見せる接続詞<sup>3</sup>

	演説で出現しやすい接続詞	演説で出現しにくい接続詞
順接	ここにおいて、よって、ゆえに、それゆえ、その結果、されば、で	だから
逆接	しかるに、しかしながら、しかれども	ところが、だが、けれども、が
添加	しかして、そうして、また	そして
転換		ところで
同列	要するに、すなわち	たとえば、特に
補足		ただし、ただ

<sup>1</sup> 接続詞は文頭に現れるもののみを対象としている。また『太陽』については口語体記事のみに限定した。

<sup>2</sup> 具体的な数値の取り扱い、および比較の方法については川島 (2024) を参照。

<sup>3</sup> 対比の接続詞については、演説において特徴的な使用傾向を見出せなかったため、表に入れなかった。

○指摘できる傾向

- ・演説においては、一般的な書き言葉よりは接続詞の出現頻度が高い。
  - ・順接および逆接の接続詞に関しては、雑誌において文語体を中心に用いられる形式の方が演説において相対的に出現頻度が高く、口語体を中心とする形式は頻度が低くなる。
- 演説は音声として実現するものであるが、どちらかといえば典型的な書き言葉に近い性質を見せる（川島 2024）。
- ・しかし、演説において出現頻度の高い接続詞は、文体的に硬い、文語的な形式（ここにおいて、ゆえに、それゆえ、されば、しかるに、しかれども、しかして）ばかりではない。
- 先に述べた内容に関連する事柄を次々と述べていく機能をもつ「で」は、演説という談話スタイルに合致しやすい接続詞である（川島 2024）。
- 同列の接続詞の中でも「要するに」「すなわち」という換言に関わるものは演説での使用が顕著に多いと言える。
- 言い換えを行う目的として石黒（2001）は、受け手の理解に対する送り手の配慮から生じ、象徴的な表現と具体的な表現、詳しい表現と簡潔な表現を相互補完的に示すことで受け手の理解を深めようとするものと指摘する。これが、音声によって実現する演説というメディアの特性に適ったものと考えられる。

○『日本語話し言葉コーパス』との比較

- ・演説は、話者が聴衆に向かって一方的に話す談話スタイルである。時代を比較するため、同様の特徴を持つ資料として『日本語話し言葉コーパス』の独話のデータを調査した。
- ・「しかし」と「しかしながら」⇒  
雑誌：「しかし」 7290 例 「しかしながら」 964 例  
演説：「しかし」 54 例 「しかしながら」 45 例  
話し言葉コーパス：「しかし」 1339 例 「しかしながら」 198 例
- ・「そして」と「そうして」⇒  
雑誌：「そして」 5221 例 「そうして」 945 例  
演説：「そして」 10 例 「そうして」 30 例  
話し言葉コーパス：「そして」 4157 例 「そうして」 41 例

→歴史的に見て「しかし」は「しかしながら」から生じたもので、「そして」は「そうして」から生じたものである（田中 1984）ことを踏まえると、演説においてはより伝統的な形式への選好を見て取ることができる<sup>4</sup>。

→この点（裏を返せば「しかし」「そして」といった、同時代においても一般的に用いられる接続詞の使用が少ない点）が、近代期演説の特異な点と言えるのではないか（現代の独話体談話とも異なる特徴を見せるので、ジャンルの特性だけでは説明は難しい）。

---

<sup>4</sup> ただし「殊に」と「特に」など、この傾向に該当しない例もある。演説・雑誌ともに「殊に」の方が頻用されており（演説で 21 例・3 例、雑誌で 1003 例・370 例）、時代的な要因による差であると思われる。

⇒種々の資料を横断的に調査することで、特定の資料、特定の時代に特徴的な振る舞いを見出していくことが課題であろう<sup>5</sup>。

#### 4. おわりに

- ・近代語の接続詞は、現代語との違いが一見して分かりにくいこともあるが、用法や出現傾向など、分析する際の観点、特に比較対象を適切に設定することで有意義な知見が得られると考えられる。
- ・副用語研究は「閉じた」研究領域ではなく、様々な問題意識、アプローチを活用することで「参入」が可能であろうし、それによって研究のさらなる進展が期待される。

#### 【調査資料】

金澤裕之・相澤正夫(編)(2015)『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集—SP 盤レコード文字化資料—』日外アソシエーツ

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(データバージョン 2024.03、中納言バージョン 2.7.2) / 『昭和・平成書き言葉コーパス』(データバージョン 2023.05、中納言バージョン 2.7.2) / 『日本語話し言葉コーパス』(データバージョン 2018.01、中納言バージョン 2.7.2)

#### 【参考文献】

- 石黒圭(2001)「換言を表す接続詞について—「すなわち」「つまり」「要するに」を中心に—」『日本語教育』110
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12
- 川島拓馬(2024)「大正～昭和前期の演説における接続表現の使用状況—雑誌と比較して—」『富山大学人文科学研究』80
- 京極興一・松井栄一(1973)「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別学校文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院
- 小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版
- 近藤明日子(2021a)「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙の通時的変化—逆接の接続詞を例に—」近代語学会(編)『近代語研究』22, 武蔵野書院
- 近藤明日子(2021b)「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙—順接の接続詞を例に—」田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信(編)『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房
- 近藤明日子(2023)『『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターに見る順接・逆接の接続詞の通時的変化』言語資源ワークショップ 2023 発表予稿集
- 田中章夫(1984)「接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹(編)『研究資料日本文法 4 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 田野村忠温(2002)「辞と複合辞」玉村文郎(編)『日本語学と言語学』明治書院
- 中俣尚己(2022)「並列を表す接続詞と文体—まとめて検索 KOTONOHA」を利用して—『計量国語学』33-7

付記 本発表は、JSPS 科研費 23K12189 の助成を受けたものである。

<sup>5</sup> 現代の演説(内閣総理大臣の所信表明演説・施政方針演説)を対象に予備的な調査を行っているが、近代の演説では使用の少ない「たとえば」が現代ではかなり頻繁に用いられている。近現代で演説の性質を揃えることは困難であり単純な比較はできないが、演説において採られる談話展開に異なりが見られる可能性がある。